

グローバル人材育成のための大学教育プログラムに関する考察

黒田 一雄（早稲田大学）

1. 高等教育の国際的・歴史的潮流とグローバル人材育成

昨年、ユネスコが主催した第二回世界高等教育会議の結論ともいえる公式声明では、その最初の部分で「現代そして将来にわたるグローバルな課題に対応するため、高等教育は社会・経済・科学・文化の多面にわたる問題に対する理解とそれらに対処する能力を進展させることに社会的責任を有している。高等教育はグローバルな課題に対するグローバルな知識を生み出すことに、社会を先導すべきなのである」と謳われている（World Conference on Higher Education Communique, 2009 筆者訳）。

また、21世紀の高等教育の基本理念として大きな影響力のあった1998年のユネスコ高等教育世界宣言では、その序文において「二十一世紀を目前に控えて直面する問題の解決は、将来の社会の展望により、および教育一般、特に高等教育に割り当てられた役割により決定されることを信じ、新たな千年の入り口に立ち、平和な文化の価値と理想が広がり、その目的のために知的共同体が動員されることを確実にすることが高等教育機関の義務である」と高らかに謳われている（ユネスコ高等教育世界宣言 1998年 日本私立大学協会訳）。

近年における情報通信技術の急速な発展による知識経済の勃興や世界的な経済統合の深化によるグローバル化の進展、そして地球環境問題を代表とする様々なグローバルな課題の出現は、他の教育段階と比しても本来的に国際的な性質を有していたはずの高等教育に対しても、その役割のさらなる自覚を迫っているように見える。

高等教育の最も原初的な理念は、大学を文字通り「Universe」なものにとらえ、国家を前提としない普遍的な知の共同体としての大学は、どのような文化的政治的背景の者にも開かれたものでなければならないとする普遍主義的・世界主義的な大学観であった。これは、ラテン語という共通言語で多国籍な学生を対象にした中世のボローニャ大学、パリ大学、オックスフォード大学、といった古典的な大学群での高等教育の歴史を基とした考え方である。近代国家が誕生する以前に生まれたこのような大学は、教員、学生共に、その国際性は非常に高く、同国人以外の教員・学生が過半を占めた時代もあった（喜多村 1984）。その知の探求の姿勢や人材育成のあり方は、当然国家の枠組みに縛られるものではなく、まさにグローバルならぬユニバーサル（普遍的）なものであったと考えられる。

しかし、歴史が下り、国民国家のあり方が強化されると、大学も国境を意識しない独立的な立場を許容されなくなり、むしろ国民統合や国家的な政策目標のために奉仕する役割を徐々に期待され、強制されるようになった。後発国、ドイツのベルリン大学や日本の東京帝国大学などはその典型であるが、従来の普遍主義的・世界主義的な伝統を有する大学も国民国家の形成と共に、より国家的な大学に変容していった。一方、アジア・アフリカ・ラテンアメリカで主に戦

後に設立された大学の多くも国家の支配と庇護、国家への貢献を意識したものであった。Kerr (1990) はこのような2つの大学モデルを「コスモポリタン・モデル」と「国民国家大学モデル」と呼び、現代の大学は、両極端な2つの矛盾するモデルを、双方とも内包しようと模索している、とする。

2つのモデルが抱える双曲性は、それらが社会的に認識し存在する地理的境域についてのみではない。コスモポリタン・モデルの大学が普遍的な知の探求をそのアイデンティティとし、社会の現実的な要請とは一定の距離を置いた独立的な機関であろうとする傾向があるのに対し、国民国家大学モデルの高等教育は、国家に対する実質的な貢献をそのアイデンティティとしており、2つの大学モデルは、その社会的役割の面でも異なった性格を有する。

その意味では、21世紀を迎えた世界における高等教育が求められているあり方は、この2つのモデルを単に融合・内包したものではなく、止揚させたモデル、すなわち、国家のみでなく世界（グローバル社会）を意識しながらも、知の普遍的な探求のみではなく、人類の共有する諸々の問題に対して課題解決型のアプローチのできる知識創造・人材育成の場としての大学ではないだろうか。先の世界高等教育会議のために Altbach らがまとめた基調報告においても、「(急速に進展する高等教育の) 国際化は、数多くの大学が地域社会や国家の境域を超えて、『グローバルな能力』を有する『グローバル市民』を育成するという社会への貢献を自覚し、大学の基本理念を拡大する過程だと見ることができる」(Altbach, Reisberg and Rumbiley 2009, 27 ページ)と述べられている。グローバル人材育成は、現代の大学が目指すべき、明確な一つの方向性とも言える。

2. グローバル人材育成をめぐる国と大学の合理的動機からの考察

上記のように、グローバル人材育成が組織的にプログラム化されていく高等教育への変容過程は、国際社会の期待の増大とこれに対する大学界全体の社会的使命に関する理念的变化によるものと理解することができる。しかし、一国の政府や個々の大学がグローバル人材育成を推進するようになる過程では、より現実的でミクロな、それぞれの個別利益や関心に基づいた政策・資源配分決定が背景に存在するはずである。ここでは、Jane Knight の高等教育国際化の合理的動機 (Rational) の分類を手掛かりとして、高等教育国際化の一形態であるグローバル人材育成を考察したい。

Knight (2008) は、高等教育国際化に関する国家レベルの合理的動機を、「人的資源開発(頭脳の獲得)」「国家の戦略的連携への貢献」「収益の獲得」「国家建設」「社会文化的相互理解の促進・国民アイデンティティの醸成」に分類している。また、同じく大学の合理的動機を「国際的威信の向上」「国際水準での教育の質向上」「学生・教職員のニーズへの対応」「収益の獲得」「大学の戦略的連携」「研究・知識の創造」に分類している。これらは、高等教育の国際化全てを対象にして、その合理的動機を網羅的に列挙しようとしているものであるが、高等教育国際化の一形態であるグローバル人材育成への動機も、これらの分類を視角にすることによって、明確に位置付けることができ、グローバル人材育成の大学における新たな意義づけを示唆することができる。

第一に、グローバル人材育成のプログラム化は大学にとって、学生の現代的学習ニーズへの対応であり、国際水準での教育の質の向上を促進するものである。ひいては、国家にとっても、個々の大学にとっても、有効な頭脳獲得の手段となる。本研究によって紹介された日本の大学における様々なグローバル人材育成のためのプログラムは、それぞれの大学を、日本人学生だけではな

く外国人学生にとっても、魅力的なものにしており、日本の大学の外国からの頭脳獲得に貢献している、と考えられる。従来、留学は二国間における、母国に帰るか、留学先の国に残って就労するか、もしくは頭脳流出か頭脳獲得かの二者択一で考えられがちであった。しかし、グローバル人材育成プログラムの生成は、そこに第三の道、つまりは国際社会で活躍する人材育成を、留学生を対象に日本の大学が行う、という可能性を拓くことになる。一方で、従来はグローバル人材育成に直結したプログラムを求めて、英米の大学に流出していた日本人の人材を国内の大学にとどめておく機能をも有している。日本の大学は、グローバル人材育成のプログラムにより、人材獲得における国際競争力を増進することができるのである。

第二に、グローバル人材育成プログラムは、国家および大学の戦略的連携・国際的威信の向上に貢献する可能性を有しており、実際に貢献している。本研究で紹介されたグローバル人材育成プログラムの多くは、海外の大学や国際機関との連携によって運営されている。個々の大学にとって、従来の国際連携は、語学や地域研究などの大学や学問研究の国籍性に依拠した、しばしは儀礼的なものが多かったが、グローバル人材育成プログラムでは、教育研究の対象がグローバルな課題であり、大学の国際連携においてのフロンティアを広げ、その連携のあり方を有機的なものに深化させる契機となっている。また、国際機関をパートナーとするプログラムは、その人材育成の成果が、日本が長年の外交課題としてきた国際機関における日本人職員の増強に資すると期待されるだけでなく、プログラムの運営そのものが、国際機関における日本及び日本の大学のプレゼンスの増大に資するものとなりうる。

第三に、グローバル人材育成プログラムの成果は、人材育成のみではなく、日本の大学のグローバルな課題に関する研究能力の向上に資するものである。これはグローバル人材の育成が将来的なグローバルな課題についての実践的なオリエンテーションを有する研究者の育成につながるという長期的な成果を意味する。そして同時に、教員や大学がグローバル人材育成に組織的に取り組む中で、その研究課題や研究方法・発表の場について、これまでとは違った指向性を有するようになる可能性をも含む。特に大学院レベルでの人材育成では、このような教育と研究の相互作用は十分に期待できる。

以上のように、グローバル人材育成プログラムは、国家や個々の大学にとっても、間接直接に大きな利益をもたらす可能性を有している。

3. 日本のグローバル人材育成プログラムへの若干の提言

それでは最後に、具体的に日本のグローバル人材育成プログラムの今後の展開に対して、以上の考察を踏まえて若干の提言を行いたい。

第一に、グローバル人材育成プログラムの理念を関係する教員・学生・連携パートナー間での十分な議論の上に、明文化すべきである。依拠すべき、国際社会や国レベルで提示された合意やビジョンには様々な可能性がある。もしくは、創立者の理念や大学の使命に関する文書、国際化戦略など、大学内にもグローバル人材育成プログラムの役割と使命を意義づけ、方向づけるための基となる文書はいくらかあろう。このようなビジョンを策定する作業は、迂遠でありながら、教育プログラムとして長期的な展望をもちながら発展するために欠かせないものであると考える。そして、将来的には、個々のグローバル人材育成プログラムの成功が、大学全体や学部・研究科全体の組織的理念の形成に逆に影響を与えることも、大学使命のグローバル化の中で、十分に可

能性があるのではないか。

第二に、グローバル人材育成プログラムの対象を、日本人のみと限定しないことを明確にすべきである。いや、限定しないのみならず、「グローバル」というプログラムの性格からも、留学生の参加を勧奨すべきである。これは先行例の大学では当然のことであろうが、一部の大学ではグローバル人材育成プログラムが日本人学生を独占的な対象としている状況がある。留学生30万人計画の成果を待つことなく、日本の留学生は増加を続けている。その留学生が母国と日本というバイラレラルな視点でのみ国際社会を見るのではなく、グローバルな視野で国際社会を見、グローバル社会に貢献できるようにする人材育成努力こそが、真に国際化した教育機関としての日本の大学に求められている。また、日本における留学生の大多数を占める中国・韓国・東南アジアの国々が、近年の急速な経済発展を受けて、国際援助の被援助国から援助国になりつつあり、これらの国々における国際協力人材ニーズや他国への国際協力に対する青年層の関心が高まっている。東アジア諸国のこうした教育ニーズに呼応して、これらの国々の国際協力人材・グローバル課題解決型の人材を日本が率先して育成することは、日本の大学の国際貢献・国際的プレゼンスを大きく高める可能性があると考えられる。

第三に、グローバル課題の解決のための研究開発とグローバル人材育成プログラムを有機的に連携させる努力をすべきである。まずはパートナーの海外大学や国際機関での研究発表の機会を意図的につくることから始めることができるだろう。より連携が深まれば、研究課題の設定、データの収集、国際共同研究の組織等に、戦略的にグローバル人材育成プログラム自体やパートナー機関を組み入れていくことができる。既にそうした連携が当然のことと受け止められている大学も多いと思うが、新たにこうしたプログラムを始める大学においては、研究と人材育成の連携が、プログラムの質の向上や発展、教員のインセンティブや資金リソースの確保につながることを理解してもらい、プログラム策定において工夫を行う必要がある。

最後に、客観的考察ではなく、筆者自身の体験や直感からもう一つ提言を行いたい。それは、グローバル人材育成プログラムにおいて重要なのは、参加者の能力の向上だけではなくグローバル課題に取り組む意欲への啓発を意図したプログラム作りだということである。特に学部においては、体系的な知識の獲得よりも、グローバル課題に対するコミットメントの育成を重視すべきである。そして、そのためには、参加者同士の育みあいを大切にすることが欠かせない。グローバル課題の解決をともに志す友を、このようなプログラムを通じて、国内外に得ることができたとき、参加者は、将来に対する最も重要な礎を得ることになる。

参考文献

UNESCO 2009, World Conference on Higher Education Communique

http://www.unesco.org/fileadmin/MULTIMEDIA/HQ/ED/ED/pdf/WCHE_2009/FINAL%20COMMUNIQUE%20WCHE%202009.pdf

UNESCO 1998, ユネスコ高等教育世界宣言 日本私立大学協会訳

<http://pegasus.phys.saga-u.ac.jp/UniversityIssues/AGENDA21.htm>

Kerr, C. 1990, "The Internationalization of Learning and the Nationalization of the Purposes of Higher Education: Two 'Laws of Motion in Conflict'", *European Journal of Education*, 25 (1), 1990, pp.55-60.

喜多村和之 1984 『大学教育の国際化』 玉川大学出版部

Altbach, P.G., Reisberg, L. and Rumbiley, L.E. 2009, *Trends in Global Higher Education – Tracking an Academic Revolution*, Boston College Center for International Higher Education

Jane Knight 2008, *Higher Education in Turmoil – The Changing World of Internationalization*, Sense Publishers